新・下野市風土記 15

奈良時代にもボーナスがあった

下野市教育委員会　文化課

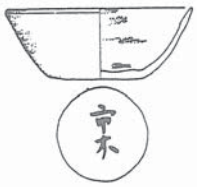
毎年、この時期になると各メディアで、暮れのボーナスについての報道を目にする機会があります。今日のサラリーマンのボーナスは、明治時代に西洋の給与体系が元になり始まったとされています。しかし、古代の藤原宮や平城宮で働く役人にも「季禄」とよばれる一種のボーナスがありました。古代のこうした季禄の制度は、下毛野古麻呂たちが中国（唐）から採り入れたものです。

当時の律令の規定では、季禄は年に二回、二月と八月に支給されました。支給されたのは銭ではなく、あしぎぬ（布）・綿・布・鍬・糸・鉄といった六種類の物品で、支給額は位や階級によって異なりました。七〇一年に、季禄の一部を和同開珎で支給するようになりましたが、基本的には物品の支給が続きました。

中国は日本と違い、季禄は米で支給されました。当時の日本の税制は米のほか、各地の特産物も税として収納されました。季禄として支給された品々はこれらの特産物を含んでおり、特に前に記した六品目は、貨幣同様単価が定まっており、等価交換が可能な物品でした。そのため役人たちは、役所で支給された季禄の品々を持って市場に出向きそこで必要な物資と交換したわけです。

平城京や平安京には西（右京）と東（左京）に市場があったことがわかっています。地方でも国府や郡衙、国分寺などの公的施設のほか主要道路が交差するような「衢」に「市」があったと考えられています。市内では、昭和五十年代の新四号国道建設工事の際、薬師寺南交差点付近の調査（薬師寺南遺跡）で、「市木」と記された墨書土器が出土しています。推測ですが、下野薬師寺の南側に門前市のような空間があったのかもしれません。『日本書紀』や『万葉集』には、八世紀以前の市として「海柘榴市」「阿斗桑市」などの木の名前を付けた市があり、市場の中央には大きな椿や桑の木があったと考えられています。古くから日本には自然信仰があり、大木には神が宿ると考えられ、大木を祀る信仰とともに人々が集まる市が存在しました。現在でも地名で「八日市」や「廿日市」などの地名が残っていますが、これらは中世頃から八日や二十日に一度、市が立つことからこの名称が付いたといわれています。広島県の廿日市は、平清盛による厳島神社造営をきっかけに木材の集積地として賑わった港であったことが知られています。

発掘調査では土器などを手掛かりに古代の流通を復元しますが、当市で出土する奈良・平安時代の土器類は、三毳山麓（旧岩舟町周辺）や益子町付近、宇都宮市の県庁北部地区のほか、筑波山麓南西部や古河市（旧三和町）付近で生産された土器が出土します。さらに大洗町やひたちなか市などの沿岸で海水を煮詰めて塩を生産した時に使用した「製塩土器」の破片も見つかっています。このほか、東海地方で生産された釉をかけた高級な緑釉・灰釉陶器、和同開珎や富寿神宝など都で鋳造された貨幣も下野市やその周辺で出土しています。井戸の中からは関西以西の西日本にしか分布しない「イスノキ」製の櫛も出土しています。現代の私達が想像している以上に多くの人々や品々や行き来していたのかもしれません。千三百年後の今、古代の市が存在したであろう下野薬師寺のそばに現代の市場ともいえる道の駅しもつけが賑わっているのも偶然でないような気がします。



墨書土器「市木」

三毳山麓産
底のスジは回転している
ロクロから糸で切離した痕

益子産
底は回転している
ロクロからヘラで切離した痕

紅まるにもボーナスが!?